

いつも、インシデント報告ありがとうございます

2016.5.18

京大病院医療安全情報79

【平成28年度医療安全活動目標】

- ① 指さし呼称
- ② 検査結果の患者への説明

点滴ラインを接続したら、一旦立ち止まって「指さし呼称」。
眼  で確認・耳  で確認・手  で確認すれば、エラーが6分の1に減少します。

想定される医療事故

- 循環作動薬を更新したあとクレンメの開放を忘れ、血圧が低下した。
 - 輸液ポンプの流量と予定量を逆に設定してしまい、輸液が急速投与された。
- いつも指さし呼称することで、患者にも「確認してもらった」という安心感が生まれるはずです。

検査結果が正常であっても患者にきちんと説明する習慣があれば、医療事故を防ぐことができます。

想定される医療事故

- 医師がうっかりと検査結果を見落として伝えない
 - 検査結果を説明するための診療予約を入れ忘れ、患者も来院しない
- いつも結果を説明していれば、仮に医師が結果を確認し忘れても、患者が指摘してくれるかもしれません。

昨年度からの継続目標
です

平成26年度より

「確認行動」「コミュニケーション」
をテーマに取り上げています。

確認行動
指差呼称

コミュニケーション
検査結果説明

今年度の行動目標にご協力をお願いします

2016.5.18

【具体的な行動を通じて確認を習慣化する】

	指さし呼称の実施	患者に検査結果を説明する
行動目標1	点滴開始時 ：名前・流量・クレンメ開放ヨシ！	オーダー時：医師「検査結果は次回説明します」
行動目標2	ミキシング時：薬剤名ヨシ！	検査時：検査担当者「結果は医師から説明します」
行動目標3	書類手渡し時：患者氏名ヨシ！	予約診療時：医師「検査結果をまず説明します」

こんな場面で使ってみよう・・・

大切なことなので昨年度と同じ場面
を紹介します

検査用紙を渡す際に・・・

結果は次回の外来時に説明します。
必ず受診してください。

検査終了直後に・・・

今日、受けてもらった検査の結果
は、医師から説明があります。
予約は入っていますでしょうか？
確認してくださいね。

「正常結果を伝えない」
「異常のときだけ伝える」
ことが習慣になると、
「連絡がない」＝「異常がない」
と患者は考えます（認知心理学的
に説明できる事象です）。

京大病院では、「結果が異常で
あったのに伝えず、治療が遅れ、
患者に有害事象が発生した事例」
が、この4年間に3件ありました。
ベテランの医師でもエラーを起こ
します。
いずれも医療ミスを認めています。



患者の医療への参加により、医療事故のリスクを減らす
ことができます。そして全ての職種の協働も必要です。

医療安全管理室作成